



【TOPICS】

- 2012 実践教育研究発表会 神奈川大会開催報告・・・1
 - ・ 会長就任のご挨拶 第5代会長 久保 紘・・・2
 - ・ 会長退任のご挨拶 第4代会長 大竹 勉・・・4
 - ・ 新理事就任のご挨拶・・・5
 - ・ 特別講演報告 『ものづくり立国』が日本再生の基本・・・6
 - ・ 機械系企画報告 「これからの技術者にどのように英語力を付与するか」・・・8
 - ・ 電気・電子・情報系企画Ⅰ 組込み分科会セッション報告「プリント配線版の現状と課題」・・・9
 - ・ 電気・電子・情報系企画Ⅱ 講演報告「省エネルギー時代における証明設計の現状と今後の課題」・9
 - ・ 建築・デザイン系企画Ⅰ 報告 先進施設視察：「ものづくり支援 KAIT 工房」・・・10
 - ・ 建築・デザイン系企画Ⅱ 教育訓練セッション発表+研究討議報告・・・11
- 『新企画』実践研のホープ・・・12

2012 実践教育研究発表会

大会テーマ 「次代に継ぐ ものづくり・ひとづくり」

2012年度の実践教育研究発表会が9月20日から9月22日までの日程で、神奈川県横浜市の神奈川県立産業技術短期大学校（以下、神奈川産業短大という）で厚生労働省、高齢・障害・求職者雇用支援機構、神奈川産業短大の後援で開催されました。大会は「次代に継ぐ ものづくり・ひとづくり」を大会テーマに掲げ、大会運営委員会および実行委員会により、いろいろな企画が準備されました。3日間の会期中、延べ600名余りの参加者により発表や意見交換、討議、交流が行われました。

3系共同企画である特別講演では、「ものづくり立国が日本再生の基本」というテーマで社団法人全国技能士会連合会の会長である大関東支夫氏の講演が行われました。

講演では、世界の中における日本の産業界の状況や日本の技術力の高さなどについての説明があり、そして混迷する日本を再生するためには、その技術力を生かしてさらに品質の良いもの作っていくことではないかという話が熱っぽく語られました。

各系の独自企画もそれぞれ行われました。

機械系企画Ⅰでは「これからの技術者にどのように英語力を付与するか」というテーマでロバート J. G ヒーリー氏の講演が行われました。これまで多くの大学等で英語教育に携わってきたヒーリー氏から、日本での英語教育の経験を通してのこれからの英語教育のあるべき姿（英語の正しい発音からしっかりと学ばせなければいけない）やそして英語教育はどのように改善すべきか（英会話まで教育しないとい

けない) また、ビジネスでの英語のやり取りで大事なことやうまくやりとりを行うための手法が話され、非常に実践的な、とても楽しい講演でありました。

電気・電子・情報系の企画Ⅰでは「プリント配線板の現状と課題」というテーマで、株式会社カヤバオフィス代表取締役の榎場正男氏の講演が行われました。講演では、設計からプリント配線板実装までの工程に関する変遷と課題、また今後求められる技術とは何かなどについて述べられました。

企画Ⅱでは「省エネルギー時代における照明設計の現状と今後の課題」というテーマで、株式会社きんでん東京技術企画部の高松篤子氏の講演が行われました。講演では、LED照明の普及の背景や動向、LED照明への置き換え以外の照明省エネルギーの手法や今後の照明環境のありかた、また照明設計の課題についての説明がありました。

建築・デザイン系の企画Ⅰは先進施設視察で、学生に自由な創作活動を支援している神奈川工科大学のものづくり支援KAIT工房の視察が行われました。

企画Ⅱでは「建築システム系カリキュラムの展開と課題」というテーマで、教育訓練セクションおよび研究討議が行われました。討論会では建築系の目指すカリキュラムのあり方や課題について、熱心な意見交換がされました。

一般講演は92件(機械系35件、電気・電子・情報系34件、建築・デザイン系13件、能力開発分科会10件)、ポスターセッションは4件(機械系2件、電気・電子・情報系1件、建築・デザイン系1件)の発表がありました。

企業展示には全国から21社の出展があり、教育・訓練の教材や関連製品などの展示が行われました。今回も廊下を使用しての展示となりましたが、各企業のブースには多くの方々が参集していました。また、今回もブースごとに展示内容について説明する時間が設けられ、それぞれ出展物についてPRがされました。

(北海道職業能力開発大学校 中田 英次)

会長就任のご挨拶

社団法人 実践教育訓練研究協会第5代会長
久保 紘

このたび、皆様方からのご推挙により実践教育訓練研究協会の会長に就任することになりました。大変、名誉なことであり光栄に存じておりますとともに、本協会の歴史と使命を踏まえて、責任の重大さを痛感し、身の引き締まる思いも致しております。伊藤昌樹、陣内 望、山下世為志、山見 豊の各副会長をはじめとして、宮澤 昊一事務局長、理事、委員、会員の方々の力をお借りして、実践教育訓練研究協会の発展のために、微力ながら全力をつくす所存です。皆様のご支援と、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



本協会は、「人材育成を行うための実践教育訓練技法の確立及び普及を図り、もって職業能力の開発と向上に資すること」を目的として、1988年に設立されました。以来、職業能力開発の一端を担うことにより社会貢献をするということを強く意識して「技能・技術の伝承・開発」から「人材育成」まで、活躍の場を徐々に広げながら時代と共に発展してきたものであります。社会や時代に敬意を払い、払われる対象として存在してまいりました。

今後も、本協会が時代という電車に置いていかれないようにすることが肝要ですが、本年は、協会が

発足して奇しくも25周年であります。この機会に、時代と職に関する背景を簡単に述べることによって、本協会の位置付けをし、未来を見つめてみたいと思います。切り口を国としますと、まず、戦後、日本は第一の大きな変革であった農業国から工業国への脱皮を図ってきました。そこでは、価値観の変化が絶大な力をもっていたのですが、「生活する」という観点から、社会は、広く国民に、「職」に就き「社会」を構成する能力、即ち「職業能力」を持つことを求めました。時代は変わり、日本社会は、今や、固有の文化をも捨てざるを得ないほどに、激しい国際競争の場に晒され、第二、第三の文化的変化を起こそうとしています。そこでは、当然のことながら、「職」に就く能力も、「社会」を構成する能力も付加価値を高めざるを得なくなってきました。特に、人材立国日本では、高度産業技術に対応する技能・技術の確保、演繹的手法による技能の技術化、技術者倫理の持ち方、価値観の異なる人の集まりとなった社会とのコミュニケーションの仕方などに課題を抱えることとなり、従来の職場訓練の延長としての職業能力開発だけでは、社会が要請する「職」に就く能力も、「社会」を構成する能力にも追いついていけないことがはっきりしてきました。「職業能力」も創生—発展—集約の過程を辿るということだと思いません。

目を実践教育訓練研究協会に移しますと、協会は、基盤とする、「人材育成のための訓練技法の確立及び普及」の目的を追求するために、常に時代にあった電車に乗り換え、その活躍の場を「職業能力開発」による「人材育成」にまで広げているのが現状です。

公益法人制度改革関連法が2006年に公布され、本協会も移行委員会を中心に、定款を書き換える仕事を始めております。本協会が、更なる発展を遂げるために、この機会に、歴史と背景を踏まえて現在までの総括と、何をすべきか、何ができるのかを組織として検討し、結論を得るべきと考えています。

以下に、本年度の本協会の主な活動について項目をあげ、所信を述べさせていただきます。

・一般社団法人に向けて

社会が何をもとめているかをよくふまえて、本協会の定款、細則及び諸規定を見直すと共に、全ての事業の一般社団法人化および財政における収支相償等移行認定に向けての対策を講じつつあります。移行後は、これまで以上に財政規律を念頭に置いた事業推進を行う必要があります。

・情報発信源としての論文・ジャーナル誌

論文・ジャーナルの評価は、本協会の評価に直結します。社会、企業、実践技術者から高い評価を得る必要があります。また、電子投稿および査読の作業が容易なシステムへの改良等、工夫をして魅力のある雑誌にして参りたいと思います。

・講演大会の活性化

講演大会の充実、本協会の情報発信の基本です。講演大会の企画と運営に工夫を凝らし、発表件数を増やすことはもちろんのこと、会員数の増加を図る必要があり鋭意努力して参ります。

・専門部会・分科会の積極的活動

協会会員の動意を収束し易く、活性化のための基本単位となっています。また、地域、産業会との積極的なコミュニケーションを図り、密で広範な情報収集と発信を行って参ります。

・教材開発事業の充実

協会の存在と価値を認知してもらい、同時に財政基盤を確立するという目的も持っています。会員数の増加とともに必要な措置です。DVD化等、教材開発の具体化、本の出版に積極的に取り組む必要が

あります。

・地域交流会の開催

社会の単位として見たときに、地域は、まとまりの良い単位となっています。また特有の性格を持っています。「職業能力開発」は地域単位が基本となるケースが多くなっています。他機関との協調も含めて情報の発信と収拾を行って参ります。

これらの活動をとおして、本協会の事業が益々盛んになり、実践教育・訓練・研究を通じて社会に貢献できるように組織をあげて取り組みたいと考えております。会員各位のご理解とご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

会長退任のご挨拶

社団法人 実践教育訓練研究協会第4代会長
大竹 勉

このたび、平成24年9月22日の実践教育訓練研究協会の総会において、会長を退任させていただきました。

会長という大役を、前会長の清水二郎先生から引き継いで5年間、会員の皆様にご尽力をいただき、なんとか任務を果たすことができました。5年間を振り返って見ますと、不慣れな私の仕事を手伝ってくださった方、進め方を教えてくださった方、私たちの実践教育訓練研究協会発展のために一生懸命に働いてくださった方など、多くの方々のおかげで、この5年間を過ごすことができました。



本来ならば皆様にお会いしてお礼を申し上げるべきところですが、文章にて失礼させていただきます。御力添えまことにありがとうございました。

私が実践教育訓練研究協会に入会させて頂いてから二十年余になりますが、時々懐かしく思い出すことがあります。1991年3月に「工学基礎数学」の本が出版され、1993年3月に「安全基礎工学入門」が出版されるまでの2年間に6冊の本が出版され、執筆者の仲間に入れていただき、とても良い勉強になりました。

そして2005(平成17)年には、当時、私が勤務していた「長野県工科短期大学校」において、第18回実践教育研究発表会が実施され、当校の学生によい刺激となったことであろうと思いました。

こうして振り返ってみますと、20年くらいの間に、私は多くの体験をさせていただいたことをありがたく思っております。

これからも、実践教育訓練研究協会がますますご発展されますよう、ご祈念を申し上げます。

新理事就任のご挨拶

九州職業能力開発大学校
建築施工システム技術科 磯野 重浩



この度の総会にて理事としてご承認いただきました磯野です。実践教育訓練研究協会の活動には、平成元年から参加させていただいております。その間、建築・デザイン系幹事、編集委員を経て現在 系事務局も担当させていただいております。

先輩方が築いてこられた実践研の幹を大切にしながら、全国におられる会員間のつながりも意識し、各地域におけるものづくり教育の実践情報をさらに活発にやりとりできればと考えております。今後、このことを目標に努めてまいります。皆さまからのご指導とご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

新理事就任のご挨拶

関東職業能力開発大学校
生産電子システム技術科 陣内 望



電気・電子・情報系幹事会より推挙を受け、この度、理事および系部会長を拝命いたしました。私自身も系部会の発足以来、常任幹事、事務局長、編集委員長など少なからず貢献してきたつもりですが、“お前まだやっとなのか”という声などもあり、また組織の若返りの必要性から2期4年間ほど系の役職から離れた時期もありました。そういう私も定年まで残り少ないこの時期に、また実践研運営の危機的状況のこの時期に、最期のご奉公ということで大役を引き受けることとなりました。

私は、常日頃、系の会議などでも、「組織の若返りの必要性」と「会費に見合った価値を生み出す」ということを訴えてきました。組織の若返りについては、若手会員の入会促進はもとより、組織の活性化のためにも“お前まだやっとなのか”という声なき声にも謙虚に受け入れ、若手でやる気のある者を見出し、積極的に会の運営に携わってもらう。会費に見合った価値を生み出すには、できるだけ多くの会員が関われる場の提供、例えば、分科会の活性化（必須）、各種討論会の実施、実践ジャーナルや発表会への気軽な投稿の機会の提供など、私の任期2年の間で、これまで誰もが成そうとして成し得なかったことへも果敢にチャレンジしていきたいと思っております。とは言え、私の信条は“常に自然体”ですから、気負わず着実に有言実行でいきたいと思っておりますので、全面的にバックアップのほどよろしくお願い致します。

新理事就任のご挨拶

関東職業能力開発大学校
生産技術科 菅野 金一

機械系幹事会より推薦を受け、この度、理事の承認を頂きました菅野です。現在、機械系専門部会の幹事及び事務局を仰せつかっております。実践教育訓練研究協会には当時の雇用促進事業団の入団時（昭和 61 年）に勤務施設の訓練課長の勧めにより、わけもわからず入会いたしました。しかし、幽霊部員ならぬ幽霊会員が長く続き、实际的に発表等で活動を行ったのは 15 年ぐらい前からです。この協会は、職業訓練業界の中で民間職業訓練施設や都道府県職業訓練施設、また私が所属する機構施設に勤務する方々がフラットな立場で研鑽・交流できる唯一の場であると実感させられています。



理事などという不似合いな肩書を頂きましたが、初心として閉塞感の漂う日本において、若い指導員の方々が夢を持って職業訓練を語れる場となることを目標とし、協会のために微弱ながら努めてまいりたいと思います。皆様のご尽力の程よろしくお願い申し上げます。

特別講演報告

『ものづくり立国』が日本再生の基本

平成24年9月21日（金）15:00 から、神奈川県立産業技術短期大学校本館棟4階大会議室にて、大関東支夫氏（（社）全国技能士会連合会 会長）にご講演をいただきました。会員数10万人以上の全国技能士連合会の大関氏は、講演で連日全国を飛び回り、肌で日本のものづくりの置かれた現状を感じ取られています。今日の技能者の現状、技能伝承の重要性、変化する社会ニーズに合わせた 大関東支夫 氏就職に結びつく教育訓練の重要性を通して、ものづくりの視点から、元気のない日本を再生するために大関氏が提唱される効果策について、ご講演いただきました。主旨は、戦後復興を支えてきたのは日本の優れた「ものづくり」です。今、その「ものづくり」が最大の危機を迎えています。今再び「ものづくり立国」を国策の柱にしましょう。以下にその抜粋を掲載いたします。正会員の皆様は、詳細を「実践ジャーナル」で掲載いたしますので、ご覧ください。



<経営から見た重要な点>

- ① 組織、会社、国家は「リーダーによって変わる」
見る（＝分析）、触る（＝自ら参加し、責任の一端を担う姿勢）、動かす（＝行動をおこす）が重要
- ② 成功するリーダーに必要な条件＝資質＋努力＋運
- ③ 管理のMSS（任せる、育てる、責任）

仕事を任せる、人を育てる、責任を取る

④ 3A職場（挨拶、明るい、相手）

「挨拶」ができる職場。「明るい」職場。「相手」の立場になる。3A職場は、生き生きしている。

⑤ 勝ちに理由なし、負けに理由あり

赤字になる会社は、赤字になる原因が必ずある。

<ものづくりで重要な3点>

「日本は技術・技能の宝庫」高度な伝統的な技術は、日本でやってこそ継承される。

「ものづくりは人づくり」ものづくりの世界は学歴が通用しない実力の社会。現代の名工の技は凄い。

教育の理想は徒弟関係。本当に人の生き方まで含めて、きちんと教えこんでいく。親子以上の関係。

「ものづくりの危機への対策」

国：人材バンク・技術者バンクなどの共同の研究機関の必要性がある。

「人づくり、ものづくり、国づくり」が基本、ものづくりを国策にする。

企業：日本は技術では勝ってるが、ビジネスで負けている。企業には国家国民に対する責任がある。

自分の孫子に対する責任、国内の後継者に継承できる拠点は残さなくてはならない。

技能士：品質競争をものづくりの世界でも考える必要がある。異業種交流も必要。

国民：幸せの指数が21位（日本は、安全と教育はすばらしいが・・・）

仕事と生活が調和されていない＝働きすぎ、居住面積が狭い。これを改善するとよい。

<おわりに>

・同じ人間、同じ出会いなのに人によって反応が違う。感動する人もいれば、しない人もいる。危機だと思う人もいれば、そうではないなんでもないと思う人もいる。この感じ方によって、人間の生き方・仕事のやり方が変わるのです。（ちい散歩より）

・真剣になればいい知恵がでてくるが、いい加減だと愚痴が出るだけだ。（ある社長さんの言葉）

・「食事をつくる三つの心」＝喜心＋老心＋大心。食べ物は喜んでつくり、母親のような気持ちでつくり、使う人の立場で考え、大きな心でつくりなさい。（永平寺 道元禅師の教え）

以上、技能士の世界を通して、ものづくり立国が日本再生の基本であるという話をさせていただきました。

この後、活発な質疑応答がありました。

（山形職業能力開発促進センター 遠藤和芳、京都職業能力開発促進センター 飯塚真次
群馬職業能力開発促進センター 有田浩之 抜粋）

機械系企画 講演報告

「これからの技術者にどのように英語力を付与するか」

平成24年9月22日(土) 10:15 から、神奈川県立産業技術短期大学校本館棟4階 大教室にて、Robert. JG Healey 氏 (小学校英語教師 那覇市教育委員会) に次のような趣旨でご講演をいただきました。

「卒業生が海外勤務する時代、英語力は不可欠です。企業から英語力のある学生を希望するとの意見が多く寄せられています。技術者も自分の業務を英語で話せる実力を持つべきです。実践技術者教育として、技術力・人間力教育と合わせ英語力についても責任を持つ教育体制を構築することが大切です。多くの大学等で英語教育に携わってこられたヒーリー氏から、日本での英語教育の経験を通して、英語教育のあるべき姿、これまでの英語教育はどう改善すべきかについて講演をいただきました。以下にその抜粋を掲載いたします。詳細は「実践ジャーナル」で掲載いたしますので、ご覧ください。

<文字を書くことから始めよう>

まずは文字を速く書く練習が大切です。8歳でAからZまで38秒で書けることが合格です。大学生は遅いので、最初の授業でAからZまでを1分以内で書かせるテストをして「なぜ速く書くことが大切」かということを理解させます。その理由は相手の話を聞くときに、単語の意味がわからない場合には辞書をひきますが、聞いたらすぐにスペルを書けることが必要なのです。会社では電話でアポをとるとき、電話がかかってきた場合、相手の名前を聞いてスペルを尋ねるときに必要なのです。文字を速く書くことができれば、将来的に英語の勉強が楽になります。板書を速く書き写し、勉強が簡単になるのです。

<単語は楽しく覚えよう>

The name is A. すなわち文字の名前はAです。次は、これを指さして The sound is A. と音読させます。人間の脳がものごとを理解するときは五感を使います。そこで、文字を指さして音読することで理解が深まります。また、自分で声を出すと、人間の脳は、「気導音」と「骨導音」の2つの音を聞くことになり、音をよく覚えることができるのです。日本では、Aの発音はア[a]となりますが、英語での割合ではアー[æ]が一番、エイ[ei]が二番、ア[a]は三番目なのです。このセットで覚えていけば、単語を読むことができるようになり、新しい単語がでてきても発音をたすだけです。単語には特別の発音もありますが、それだけを覚えればよいので、勉強が簡単になります。ここまでできたら、子どもたちは学校をやめません。難しくても全部理解できるからです。

日本では、子どもが英語を嫌いにならないように楽しく教えるようにした方がいいと思います。英語が友達になります。初めは多少苦しくて、それを乗り越えることでプライドが満足させられます。しかし、文法の勉強は苦しいからダメです。

続いて、<文章では日本語との違いに注意しよう><文のパターン(文法ではない)をだんだん長くしよう><リスニングテクニックをマスターしよう><仕事ではリスニングテクニックが重要>とより実践的になっていきます。

(東北職業能力開発大学校 小林、群馬職業能力開発促進センター 塩練俊一
群馬職業能力開発促進センター 有田浩之 抜粋)

電気・電子・情報系企画Ⅰ 組込み分科会セッション報告 「プリント配線版の現状と課題」

(株)カヤバオフィス代表取締役、榎場正男先生に、プリント配線版の現状と課題についてご講演いただいた。マイコンなどを用いた電子回路を使用し訓練を行っているが、プリント配線版の製造工程や特徴、問題点や新しい技術に関する知識は、意外と知られていない。
今回の講演では、設計からプリント配線版の製造、実装までの工程に関する、今までの変遷と課題についてお話しいただいた。主な内容は以下のとおりである。

電子機器の生産構造	片面基板の製造工程
ユビキタス社会で求められる機能	両面基板の製造工程
基板メーカーの部品内蔵化の動き	多層基板（マスマミ）の製造工程
通信モジュールのニーズ	多層基板（ピンラミ）の製造工程
電気製品と基板の関係	ビルドアップ基板（ALIVH 法）
半導体パッケージング	パターン細線化の課題
銅張積層板	設計の課題

職業訓練の現場では、片面のプリント配線版に、手による半田付け、DIP 型の電子部品を使用していることが多い。アナログ電子部品+プリント配線版、デジタル電子部品+プリント配線版と、電子回路の実験・実習でも必ず使用している部品ではないだろうか。しかし、電子部品の特性等は座学や実験等で学習するが、それらと組み合わせ使用するプリント配線版に関する学習は行われることが少ない。

今回、電子機器の生産構造から、電気製品と基板の関係、プリント配線版の製造技術に関する、貴重なお話をしていただくことができた。この場を借りて、榎場先生にお礼を申し上げたいと思う。ありがとうございました。

（職業能力開発総合大学校 玉井 瑞又）

電気・電子・情報系企画Ⅱ 講演 報告 「省エネルギー時代における照明設計の現状と今後の課題」

株式会社きんでん 技術企画室 東京技術企画部 CS チーム課長 高松 篤子 先生 より
LED 照明による省電力の効果と動向、照明設計の現状と今後の照明環境等について講演していただいた。



写真1 講演



写真2 質疑応答

講演内容

1. 照明のエネルギー事情
 - ・LED 照明による最大省電力効果
 - ・照明による省エネルギーのメリット
2. LED 照明
 - ・LED (発光ダイオード) の特徴
 - ・各種光源の省エネ性 (発光効率) とLED照明の発光効率の推移
 - ・電気用品安全法による規制と直管型LEDの規格争い
3. 照明設計の現状
 - ・測光量と単位、照明計算・光束法
 - ・照度の設定 (JIS 照度基準の改定と労働安全規則)
 - ・照明制御 (昼光利用、調光/消灯、照度センサ・人感センサ)
 - ・照明方式の応用 (タスク・アンビエント方式)
4. 今後の課題 これからの照明
 - ・空間の明るさ感の新指標 F e u (フー)
 - ・知的照明システム (光環境に関する研究、可変色温度、納入事例)
 - ・有機EL (有機エレクトロルミネッセンス)

最後に電気用品安全法によるLED照明の規制や規格、植物工場用の照明等の内容で活発な質疑応答が行われた。

(東北職業能力開発大学校 中澤 直樹)

建築・デザイン系企画 I 報告 先進施設視察：「ものづくり支援 KAIT 工房」

建築・デザイン系では、2012年9月20日に「ものづくり支援」に取り組む「KAIT工房」を見学させていただきました。「KAIT工房」は「神奈川工科大学」が2005年からの4年間をかけての再開発計画の一環として、ものづくりの夢を実現させる目的で設立したもので、カリキュラムに組み込んで利用するのではなく、自由な時間とやりたい事を自由にやれる施設です。

金属加工、陶芸、鋳造、木工加工、レーザー加工、モデリング加工、基板加工、印刷等の分野について、PC連動の機械や版画、電子工作等の機器が設置されていて、材料や工具、道具類なども整備されています。6名の指導員と学生アルバイトの支援で、安全講習を行った方が利用できるシステムです。学生はもちろん地域の方(子供も含む)でも、申し込み、許可を得て工房を利用できます。

学生は、ライセンス取得や夢プロジェクト(max100万円/チーム支援制度)の利用により、ソーラーカーの競技会や「鳥人間コンテスト」等にも積極的に参加し、実績もあげています。また、地域住民を対象にものづくり体験会や化学教室等のイベントで利用されています。建築物としても日本建築学会賞を受賞するなど興味深いものでしたが、運営についても素晴らしい内容でした。ご案内いただいたスタッフのみなさまありがとうございました。



写真-1 KAIT 工房の全景



写真-2 「鳥人間コンテスト」で活躍した機体



写真-3 大会を終えたソーラーカー
(秋田職業能力開発短期大学校 小笠原 吉張)

建築・デザイン系企画Ⅱ

教育訓練セッション発表＋研究討議

『建築システム系カリキュラムの展開と課題』

2012年9月21日(金)午前11:20-12:20の時間帯にて、神奈川県立産業技術短期大学校E会場1404教室において、大分県立産業技術短期大学校建築システム系教授 松尾浩助氏をコメンテーターとして、教育訓練セッション発表に続く研究討議として実施しました。研究討議の趣旨は、建築システム系では平成23年度より専門知識・技術の習得や職業意識とコミュニケーション力の醸成を前提としたカリキュラムと併せ、学生のモチベーションの向上、段階的な向上意識の醸成、



就職段階での優位性などを考慮した検定試験や資格試験の習得に力を注いでいる。講演当日は、現行のカリキュラムの構成とねらい、1年間の試行期間を含む2年間の展開を通しての実績と課題についての詳細なご報告をいただき、会場参加者からの質問や提言を受けた討議が実施されました。今後の展開につながる意見交換の場となりました。

(東北職業能力開発大学校 星野 政博)

『新企画』 実践研のホープについて

当協会では、より活発な活動を進めるために「会員の拡大」に努めております。各系・各分科会において、会員拡大に力を入れていただいている結果、近年、若手の会員が増加しつつあります。しかし、一方では、当協会には興味はあるものの何となく敷居が高いというご意見も耳にします。そこで、現在活躍している若手会員に焦点を当て、「実践研のホープ」と題して新企画を立ち上げました。入会した動機や当協会における活動内容、自分にとってのメリット等を掲載させていただき、少しでも多くの方々に当協会の活動に理解を深めていただき、会員拡大に繋げて行きたいと考えております。

全国の職業能力開発施設（厚生労働省所管の高齢・障害・求職者雇用支援機構立大学校、短大校、ポリテクセンターおよび県立短大校、民間企業立短大校など）、文部科学省系の大学や高等専門学校の教官・指導員、あるいは民間企業の技術者で、自分が「若手」と思っていれば誰でも投稿できるものとします。会員の皆様、日頃の活動をアピールする場としてもお使いいただけたら幸いです。そして、多くの仲間と活発な活動が出来ることを願っております。

この新企画は、次号より掲載予定です。皆様からの情報をお待ちしております。記事半ページ程度、写真1枚程度を添付していただき、以下のメールアドレスへ直接、もしくは編集事務局まで封書でお送りください。またこちらからも記事のお願いをするかもしれませんが、そのときにはご協力くださいますようお願いいたします。

(石川職業能力開発短期大学校 刈部 貴文)

編集後記

今回は2012年秋号として、今年度開催された2012実践教育研究発表会 神奈川大会の報告特集を掲載致しました。今年度の発表会も大盛況に終えることができました。関係の皆様ご協力をありがとうございました。来年度は栃木県での開催を予定しております。次号は、研究奨励賞受賞者紹介等を予定しております。

WEB実践ニュース編集事務局では、皆様からの各地のポリテクビジョンや催し物に関する情報をお待ちしております。記事は半ページ程度、写真2枚程度を添付していただき、以下のメールアドレスへ直接、もしくは編集事務局まで封書でお送りください。またこちらからも記事のお願いをするかもしれませんが、そのときにはご協力くださいますようお願いいたします。

また、勤務先、メールアドレスの変更は、分かり次第、実践教育訓練協会事務局までメールまたはFAXにてお知らせください。



発行責任者：久保 紘
発行：(社)実践教育訓練研究協会事務局
〒185-0021 東京都国分寺市南町 2-18-36-203
TEL 042-300-1651 FAX 042-300-1652
<http://www.jissen.or.jp/> E-mail: jissen@nifty.com

編集責任者：刈部 貴文
編集事務局：石川職業能力開発短期大学校
〒927-0024 石川県鳳珠郡穴水町由比ヶ丘いの 45-1
TEL・FAX 0768-52-4861
<http://www.jissen.or.jp/> E-mail: jissen@nifty.com

広報委員会 Web Jissen News 編集部門：刈部 貴文・小坂 大吾・鳥谷部 太・永野 秀浩
広報委員会 Home Page 編集部門：安井 雄祐・水渡 博幸・新島 泰宏・太田 隆博
広報委員会 委員長：有田浩之

発行・編集：(社) 実践教育訓練研究協会 広報委員会
JISSEN NEWS 2012 秋(No.177)
